

## 『 望みを抱いて 』

ローマ人への手紙 4章 17～25節

青木 信太郎 牧師

### ◆ アブラハムの信仰

今朝のテキストを読み解くために重要な箇所は17節です。【彼は、死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じ、その御前で父となったのです。】アブラハムは「神は死者を生かす神である」ことを信じ「神は無いものを有るものとして召される神である」ことを信じた。だから神の御前で信仰の父となり得たのだとパウロは説明するのです。

【18-19節】アブラハムは【望み得ない時に望みを抱いて信じ】たとは、とうてい希望を持つことが出来ない絶望的な状況の中であって、しかし希望を抱いて信じたという意味です。創世記12章において神様はアブラハムに「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福する」と約束してくださいました。しかし高齢であるアブラハムとサラには子がおりません。アブラハムは自分に仕えるしもべエリエゼルが跡取りとなって子孫繁栄に繋がると考えました。そんなアブラハムに神は言われます。「あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの後を継がなければならない」そしてアブラハムを外に連れ出し、満天の星空のもとで【さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。～あなたの子孫はこのようになる。】と約束してくださいました。アブラハムはこの約束を信じました。そして神はアブラハムを義と認めてくださったのです。アブラハムは神様の約束を信じたのですが、自らと妻サラとの間に子孫が繁栄するとは考えませんでした。事実、創世記16章では妻サラは女奴隷ハガルを代理母としてアブラハムに与え、イシュマエルが生まれます。代理母ハガルを通してアブラハムの子が生まれたのです。先に観た「あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの後を継がなければならない」という神様の約束がこの様に成し遂げられてゆくとアブラハムは考えていたことでしょう。そんなアブラハムに神様は驚くべきことを語られました。【創17章15-19節】既に100歳になろうとするアブラハムと90歳の妻サラに子が与えられる。そしてその子をイサクと名づけなさいと神様は言われたのです。そしてアブラハムの子イサクの子孫を祝福されることを約束されたのです。アブラハムはひどく驚き感心しましたが、この神の約束を信じたのであります。

アブラハムは100歳、既に肉体の衰えの説明は必要ないでしょう。子が与えられるには死んだも同然の肉体と言わざるを得ないでしょう。同様に妻サラも90歳、既に子を産むための胎は閉じられている筈であり、やはり子が与えられるには死んだも同然の肉体です。アブラハムはそれを認めていました。ですから一瞬アブラハムは神のことばにとまどい、笑いました。しかしアブラハムは信じたのです。もはや死者同然のこの身体を神様は生かしてくださる。そして未だ存在していない子孫を星の数ほどに繁栄させてくださるといふ神様の約束を信じたのです。アブラハムの信仰とは「死者を生かす神」そして「無いものを有るものとして召される神」であると信じる信仰であったとパウロは解説するのです。そして本来ならば絶望的な状況であるにもかかわらず希望を抱いて信じた信仰であるとパウロは語りました。

### ◆ 神の約束を信じる信仰

注目したいことが二つあります。一つは、信仰とは神の約束を信じるということでありす。【20-22節】アブラハムの信仰を通してパウロは信仰の本質を教えます。それは「神様が約束されたことを実行してくださる、成就してくださる」と信じるのが信仰であるということです。すなわち私たちの願いや要求を叶えてくださるご利益信仰ではないということです。神様の祝福とは、アブラハムとサラが願ったから子宝に恵まれるという約束ではありません。神様の側からアブラハムとその子孫を祝福し、星の数ほどの大いなる国民としてくだ

さると約束してくださったのです。それはアブラハムとサラとの間に与えられるイサクを通して祝福するとの神様からの約束であり契約でありました。アブラハムは願いが聞かれることを信じたのではなく、神が約束されたことを神ご自身が実行して成し遂げてくださると信じたのです。神様の約束を信じるのが私たちの信仰の本質なのです。

もう一つ注目したいことは、アブラハムのこの信仰は強められて確信に至ったということでもあります。アブラハムは決して不信仰になることなく、神の約束を疑うことはなかったとパウロは語っています。むしろ「信仰が強められて、神に栄光を帰し、確信に至った」と20-21節で説明します。アブラハムは神の約束の実現を疑うことはありませんでした。しかし神様の約束は常に人間的な常識の範疇を超えることを思い知る人生であったと言えます。子がなかったアブラハムは当初、しもベエリエゼルを通して実現すると考えました。しかし「あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの後を継がなければならない」という神の言葉を信じました。そしてサラの助言もあり、女奴隷ハガルを召し入れる事でアブラハムにはイシュマエルが与えられることを通して神の約束が実現すると考えました。そんなアブラハムに神は「わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。」と、高齢の妻サラとの間にイサクが生まれることを約束してくださりました。その時、アブラハムは「ひれ伏して、そして笑った」と創世記17章に記されているのです。「笑った」とは神の約束を疑う不信仰に陥って笑ったのではありません。人間の常識の範疇においては笑うことしか出来ないほどの驚くべき神のことばであった様子であると言えるでしょう。やがてこの笑いは喜びに変わります。イサクという名は「彼は笑う」という意味です。アブラハムは常に自らの常識の範疇で神の約束を信じる信仰から、望み得ないことを実現してくださる神の約束であるという希望の信仰へと強められて確信に至ったのです。私たちが神の恵みによって賜う信仰は、神によって一層強められて確信に至るのです。

#### ◆ 私たちの信仰

最後にパウロはアブラハムの信仰と私たちの信仰は同じであることを説明します。私たちも「死者を生かす神」そして「無いものを有るものとして召される神」であると信じる信仰によって神に義と認められるのです。【23-25節】それはイエス・キリストの復活であり、永遠のいのちへの信仰に他なりません。私たちが「信仰義認」と言うとき、イエス様の十字架上での贖いで留まってしまわないでしょうか。もしイエス様が十字架で私たちの罪の刑罰を身代わりに受けて死んで葬られてそれで終わりならば私たちの信仰は虚しいのです。滅びに打ち勝つことが出来ない救い主ではないのです。イエス様の復活とは滅びに打ち勝つ永遠のいのちの保証に他なりません。「死者を生かす神」はイエス様を甦らせ、天の御国へと凱旋させられました。そしてイエス様は今も常に私たちのために取り成してくださっています。イエス様の十字架と復活を信じる私たちもまた、この肉体は朽ちて滅びようともイエス様同様、永遠のいのちに生きるものとされて天の御国へと招かれているのです。未だ見ぬ確かめることの出来ない、まるで無いように思える永遠のいのちを私たちの内にあるものとしてくださったのは、イエス・キリストの復活によるのです。私たちもまたイエス・キリストにあって「死者を生かす神」そして「無いものを有るものとして召される神」であると信じる信仰によって神に義と認められるのであります。

イエス様は言われました。【あなたがたは心を騒がしめはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたをもいようにするためです。(ヨハネ14:1-3)】私たちの望みとは、イエス様の十字架と復活によって与えられる永遠のいのちの約束です。神がこの約束を実現されると信じるのです。罪に悩む私たちには望み得ないなかで与えられている救いの約束です。この素晴らしい望みを抱く信仰を受け取っていただきたいと切に願います。